HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 北海道におけるキリスト教学 ： 北海道におけるキリスト教史の研究について |
| Author(s) | 鈴江, 英一 |
| Citation | 基督教学, 27, 34-35 |
| Issue Date | 1992-07-05 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/46509 |
| Type | other |
| File Information | 27_34-35.pdf |




Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# 北海道キリスト教史の研究について

鈴江英一

## 一、はじめに

「北海道におけるキリスト教学」をテーマとした三〇周年記念シンポジュームに発言の機会を与えられたが、もとより、一般の歴史学の学徒であって、神学はまったくの専門外である。専門は北海道の地方制度史や古文書学であり、北海道史の一環としてキリスト教史関係の多少の論文や著述をしてきたに過ぎない者である。ただ、今回の準備の過程で、『日本の神学』二七号、二八号で「日本教会史の編纂と叙述」という特集が組まれていることを知った。ここでは、各個教会史や地方のキリスト教史研究が、神学の一分野として考えられており、そのように考えてこなかった私には、意外の感と示唆を与えられた。

もっとも、今日の私の発言は、北海道史研究一般の立場から、北海道のキリスト教史の研究を見るというところにとどまるもので、これまでの研究の流れを概観しつつ、その課題について述べることとしたい。

なお、北海道キリスト教史の現段階を研究史として見るため「北海道キリスト教史研究主要著作目録」を作成した。未定稿ではなはだ不備であるが、これを参照しつつ述べていきたい。

## 二、北海道キリスト教史研究の現段階

この目録では、一九三二年から始まる。それ以前の著作は歴史研究というよりも信仰の表明、証言であった。キリスト教史の研究は一九三二年から六〇年代前後にかけて一つの成長をとげる。この時期の研究は、北海道の歴史、なかでも開拓発展の歴史に、キリスト教、クリスチャンがどのように関与し貢献してきたかについて、積極的な評価を与えようとするものであった。「北海道の歴史のなかで、いかにキリスト教が重要な役割を果たしてきたか」ということが、叙述の中心であった。逢坂信忠の『クラーク先生詳伝』など一連のW・S・クラーク研究は、この視点を最も濃厚にしたものといえる。これらは、

長年の蓄積と通俗性を持ち、現在でも教会内外から、厚い支持がある。

これに対し、一九六〇年代以降、この視点を批判し克服しようとする研究が現れてきた。ひとつは、キリスト教、クリスチャンの歴史的貢献の過大評価を見直そうとするもの（榎本守恵、J・M・マキ、太田雄三など）、ピュウリタニズムや札幌バンドなど、既成の概念規定を厳密にし直そうとするもの（福島恒雄、大山綱夫）である。同時に、史料の発掘が盛んになり、クラーク、J・バチラーなどについて、オリジナルによる研究が進んだ。

一方、六〇年代後半以降、国家と信仰、とくに第二次大戦下のキリスト教への弾圧、また妥協、順応が研究対象となってきた（金田隆一、鈴江英一）。さらに、八〇年代には、地域社会における信仰の受容と発展、教会形成の過程を見ようとする研究が、六〇年代以前とは違った視点でなされるようになった（福島恒雄、大浜徹也、『札幌とキリスト教』）。この間、各教派教区史、教会史の編集も盛んに行われ、この三〇年間に北海道キリスト教史研究は大きく発展した。

## 三、北海道キリスト教史研究の課題

北海道のキリスト教史は学問として成立し、かつ成長しつつある。しかし、今後、次のような方向に進む必要があろう。そのひとつは、北海道キリスト教史の全体像の構築に向うことである。いまひとつは、研究の動機、関心が、信仰の励まし、教会の教訓、あるいは、運動の課題に応える等々にあったとしても、これらの視点を批判的に整理し、歴史研究としての自立を図ることである。これは、研究の主観性を脱却して、客観性を確保するために、欠かすことの出来ない要件ではないかと思う。